

弩真ん中を知る⑤

三月十四日

兎玉雨子

先の東日本大震災をテーマに、都市や同じ国に住みながらも生じた「痛み」のギャップ」そのものを描き、私なりに何か伝えられたらと思います、この作品を掲載することに至りました。

あくまで作品中での世界ですが、読んでいただく方の中には、不快に感じられるであろう表現があるかと思えます。特別な思想や意見ということではありません。一家の表現の方法のひとつと、なにとぞ作品のご理解をよろしくお願い申し上げます

桜は忘れた頃に人知れずに蕾を膨らませる。わゝ蕾になつてゝとか思つていたら咲いてる。咲いてるよゝとか言つてたら散る。桜が雨みたいに降り注ぐゝつて浮かれてたら、春の強い雨がかわい花びらを一枚一枚確実に撃ち落とす。高校生に桜を楽しむ余裕を許さない。

朝の新しい空に印刷されたソメイヨシノの枝の先がぶっくりぷっくり実をつけるように腫れあがる。もう咲きそうつていうか、はちきれて爆発しそうなくらいの蕾。この花が咲く頃には野島と私はどうなつてゐるんだろうとか、思ひかけて思考を停止する。痛いじゃんそうゆうの。頭の中ハッピーターンみたいな、無理。そうゆう景色に酔いしれてるやつら、無理。僕は私は村上春樹の小説の中に生きてゐるみたいな、無理。無理無理無理。

今日から予備校が再開する。勉強もちゃんとやる。

私だけでも今までを取り戻す。気分になつてばつくれたりはもうしないよ。まだ余震は続くしその度にネットは騒ぐけど。友達はいいい子になるけど。ふひっ、きもいんだけどどうしちゃったの？大人のなんだかビジネスとか高学歴だとかちよつと自己顕示欲が強そうで俺は俺は俺は俺はみたいなの、絶対友達にしたくないしまともに付き合ったら頭狂いそうなやつらが「東西線運休。震災は終わらない。」とか！「。」とか！わ！だめだよそうゆうの、本人は真面目にやつてるかもしれないけどもしこの震災で日本終了しなかったらどうせ半年後ぐらいに「講演会終了。いい話が聞けました。先生ともお話ができました。いいブレスト。」とか！結局その先生と俺は話したぜ休日も意識を高く行動してるぜつていうアピールでしょ。震災を憂う俺。はゝゝゝゝしようもな。そんな大人にはなりたくない。こんなときに不謹慎だと言われそうなくらいにしっかり運営をする予備校の方がいい。私、予備校の講師とか学校の先生になる。国語か英語の先生になつて、クラスの担任持ったら絶対「友達は君たちの飾りじゃないんだよ」つて教える。予備校の講師だったら何も言わずに黙々とその授業で教えるべきことを教えてあげたい。

予備校の準備をきっちりジャンスポのリュックに詰めて、駅の階段を降りて横浜へ向かう。昨日はなんだかんだ薄いとはいえしつかりコンタクト入れてはりきつちゃったじゃん、それで結局おつかいだけして帰ったじゃん。今日なんかジーパンとパーカーだけです。各停に乗ってゆっくり余裕を持っていく。というか全部各停になっていた。

電車の中の電光掲示板も節電のためとかいってついてなくて、そうゆうときは電車の広告を見ながら時間を潰すかアイポッドにいったライブとかMVを見るようにしていたけど、アイポッドの充電がちよつとしかないから帰りの分も考えて広告を一つ一つじっくり見る。脱毛の広告。両ワキ二千円ってほんと？どうせ二千円じゃ毛根死滅しなくて、だいたい二、三万くらい払ってじゃあ腕も脛も指も背中もつてずる五万十万とかいくもんなんですよ。ってちゃんといつも通りの毒吐きも遂行する。

一つ駅に停まり、そしてドアが閉まる。電車は毎日毎日時間通りに動く。どうやらイタリアとかフランスとか外国ではそんなことないらしいけれど、日本は時間通りに来ることが当然だ。私みたいに一度決めたことを数分で覆すこともしないで、数分たりとも遅れないように鉄道会社さんは毎日毎日真面目に真摯にマニュアル通りに動く。マニュアル人間になるとか偉そうに言う人いるよね、あれ馬鹿だよ。決まった通りに動いてくれる人がいるから私みたいなちゃらんぼらんが気分屋のままでもいられるんだよって。そこはちゃんとわかっているから、あんまり馬鹿にしないでほしいし。

あくちくしよう、私なんでイタリア人に生まれなかったんだろう。いや白人の女の子可愛いとか、無駄にカタカナ語をローマ字で書いたり海外ドラマ観てアシレイがくとか言わないけど、だってイタリアってシエスタ制度とかあるんですよ。電車が予定通り来なくても、時計の針や数字を逆算したり毎日頭の中で計算しなくてもいいんですよ。それでパスタやピザは安くて美味しいんですよ。人間だもの、認めてよ。って考えもイタリア発祥

じゃなかった？うわゝ、生まれる国間違えた。うわゝ考えだしたら予備校行きたくなくなった。だめだだめだ今日こそは：とかこれにもおおらかな文化が私を抱っこしておうちへ返してくれるんだろいなあ。変化も平穩も畏れずにいたい。

電車のドアの方へなんとなく、ベビーカーの車輪ってなんでわりと重い赤ちゃんを乗せてコンクリの上を走らされているのに削れていないんだろうとか考えて、そのまま色んな人の足元を見てキリングタイム大作戦を遂行していたら、ティンバー？ティンバーと濃紺のジーパン？んで無地のグレーのセーター？ん？あれ？見たことなくもないぞ？って首から下のファッション。少し驚鼻で唇の薄い横顔？長いまつ毛？くるんくるんの少し明るい地毛？：：：：：野島。

とても反応がしづらい。きゃー野島だゝかつこいい今日もおつしやれあのティンバーって付き合ってた時に新しく買ったんだあって見せてきたやつだよね！鼻とか二重の目とかやばい昔みたいにへたくそなキスしてお願い！とか思うビッチな自分になんてわざわざ考えなくても気付いてるけど、もう一人ビッチな私が、ちよつとやべえ今日マジですっぴんてかてかだし髪はぼさぼさだし喉乾いてるから口臭かったらどうしよう歯になんかついてないかなどうせ会って話しかけて「うわ今日の斉藤マジブス」とか思われたらもう自信ないや、って地面にのの字書いてる。ビッチとビッチのコンフリクトが始まる。ビッチビッチのお年頃なもの。とりあえず私は顔を背けて下を向く。なんの訪れも予感させない自分の膝頭を凝視する。

こんなに努力して気付かれないように頑張ったのに、私の膝頭を中心とした視界にティンバーのつま先が忍び寄る。来たああんと叫ぶビッチ①と来るなあああと泣くビッチ②。後者はプライドが高い故に完璧ではない自分を見せたくないのだ。前者はとにかく野島がいれば世界は薔薇色になる。「斎藤じゃんかよ」と野島。瞬時にビッチビッチは考える。

どんな風に顔を上げる？どんな感じに笑う？なんて言う？野島じゃくんってボーイッシュにお互いにお友達なかんじ？おおとか言う？それかびっくりした演技でも一発かましてとりあえずこの問題を先送りにする？

「………びっくりして言葉が出ない」

「なんだよそれ」

ごん、と野島が私の頭を上から軽く手のひらで叩く。ほらあこうゆうの、こうゆうさりげないボディタッチ。すごいんだけど、何この人。何がすごいって、私の頭をはいたくせに私を幸せにすることだよね。

「何してんの」

「電車乗ってんの」

「死ねよ」

「…予備校いくの」

「え、おまえんとこやってんの？」

「なんかあ今日からなんだって、野島のとこまだなの？」

「そりゃやんないだろ」

そっか、野島だって、あの大きく揺れた日に同じ大地を踏んでいたんだよね。ちよっと浮いてるとか、ないもんね。壮大。離れていても同じ地球に住んでいるっていうの、わかる。同じ空を見ているっていうの、わかる。今まで馬鹿にしてきたけどJ・POPの歌詞侮れなさすぎ。ただこうゆう時にしか有難味感じられなさすぎ。

「っていうか地震大丈夫だった？」野島は一本の釣り革に両手を絡ませて前のめりにぶらつく。そのまま釣り革が都合よく千切れて私のところへ倒れ込んで来いよ。

「あの日ね、私葉子と一緒に居たんだよ。町田。んで葉子のおばあちゃんち泊まったの」うけるよね、といつもノリで言いそうになる。うけていいの？これは不謹慎になるの？

「マジかよ！うける」

うけていいのね。

「俺あの日学校泊まったんだよ」

「えっマジイ？」ああ葉子と葉子のおばあちゃんちに泊まるくらいならみんなと一緒に学校行けばよかったとか一瞬でも考えてごめんなさい、悪気とかじゃなくて本当に。それまで二人いたビッチの間に清楚で正義感の塊のような私が現れる。ちよつと私たち、何考えてんのって言うのと、ビッチビチは黙る。さすがに罪悪感とはちよつと違う、自分たちへの失望混じりの溜息を二つ吐く。

でもいつも通りの姿勢を崩さないんじゃないの？ってビッチ①が言うのと、ビッチ②もそれまでの態度を手のひらを返すように変えて①側につく。「あんたはさあやっぱり友達とかノマドワーカー（笑）と同じなんじゃん」。正義感
は押し黙る。

ごもつともじゃないか。私は何を迷っているんだ。勉強もする。ちゃんと
する。不条理を見抜くことも忘れない。だけどそんな高尚な志の前に、私は
ひとりの女の子でしょ。その女の子の部分まで揺らさないって、私は決めた
んでしょ。

「あれ、斉藤どこで降りるの？」

「…野島は？」

「俺え？俺は横浜だけど」

「え？なんで？塾ないんでしょ？」

「いや別に普通に買い物」

やったー横浜。それに野島だって別に普通に買い物してるんだよ。私がご
ちやごちや考える必要もないよ。

「私も、横浜」

「そっか予備校」

「まあ、夕方からなんだけどね、今日」

「そうなの？」嘘。

「予習終わったし、なんかどっかで時間潰そうかなって」

ううん本当は時間びったりだし予習は結局昨日半分までしかしてないむしろ時間欲しいくらいなんだけど、かわいい嘘。このまま一緒にとか、いいとか考えちゃう。けど予備校行くなって決めたじゃん！って怒る正義感。

「へえ〜」

このまま横浜でお昼でも食べたりにきちゃうのかな。今日そんなにお金持ってきてなかった。どうしよう。おごって頂く？そしてそのお金を返すとか色々理由つけてまた会う約束できちゃう？私、そこまで高度なコミュニケーション能力ある？

電車が地下に潜り、窓から見える色が暗くなる。そろそろ横浜に着く。そしてそろそろ話題も欠く。野島のティンバーのつま先をじっと見て、なんかだいぶ履き古していたんだなあと気付く。このティンバーの汚れが生々しい。その靴は、私が野島と別れたあともずっと、野島と一緒に色んなところに行つて色んな経験をしてきたんでしょ。ずるいよ。たかだか靴のくせに。

「そういえばさあ、今年、桜が咲くの早いんだって」

植物一つ窓から覗かない地下で、私の頭上で大好きな声が「さくら」と言う。野島に桜っていう単語が似合わない。ちぐはぐでくすぐったい。

「そうなんだ、あーてかなんかもう蕾になってて、そうだよね、早いかも」

「なー。お花見するのに寒いからなあ」

「お花見なんか行くの？」

「行くよ？」

「……へー」

まあ男子同士でお花見とか行くのかわかんないし、家族で行くのかもわからないけど。ああいいなあ、春に付き合えば良かったんだよ。なんで夏の終わ

りにくつついて冬に桜が咲く前にきよならしたんだ私、もう。

横浜駅に着く。長いエスカレーターを駆け上がらないで左側に寄って、そしてあえて野島の後ろにひつつく。上目使いをするためじゃない。全然違う。またあの大きな手のひらで、頭をはたかれないから。

でも喜びと焦りのあまりにビッチビチも正義感も色々と意見を出し合いすぎて頭がぼんやりとしてくる。目が乾く。へらへら笑ってないかなあと思っても、とりあえず笑わなきゃって、なんか哀しい。話題がないことを恐れてあーとかうーとか言うのも辞めたい。私はそんなじゃなかったはずなのに。わりとやりたいことはやり通す、無理はしない、いい意味で自分第一って、みんなそんな何をいちいち悩んでいるの？ってそんな目をするのが得意だったはず。

エスカレーターが終わってしまったって、ついぞ改札までも会話がない。私は何かと忙しいふりをして 아이폰 を出してみたりしても、メールも何にもないからとりあえずアプリケーションが整列するディスプレイを眺めるだけ。不毛すぎる、無駄しかない動作。このまま無駄のままに生きていくのか？改札のピッもちゃんと存在に意味があるというのに。

野島は改札を出ると、立ち止まる。

「じゃあ、ばいばい」

あれ、ばいばい？

あーばいばい。くそ。

私はお呼びでないと。どっかお茶飲みながら大して有意義じゃないこと、いっぱい話したかったのに。下ネタ言わないように頑張ろうとか考えてたのに。嘘ももったいない。とりあえず私は予備校の方へ歩き出す。で、引き返す。だってやる気起きないから。こんな風にいっぱいばいばい考えたけど、なあんだって脱力しちゃう。だから別れたんだっけ、私だってメール中毒でもないからどっちかが我慢していたわけでもなかったのに、こうしてさらっ

と、本当にするつとすり抜けていくように別れちゃったんじゃん。激しい燃えるような展開も脳が硬直するほどの苦しい思いもなかった。いやまあそりゃ、やることはやったし確かに付き合っていて一番愉しかった時はにやにやし合ったりえええええエツチしちやったああ股痛いヤバイ〜とか考えてたけど。でもそれは違う。ときめきとか情熱の愛とか恋っていうか………：性欲？それもなんか違うんだよなあ、そんなかつこよくないんだよね。セックスって言えないでエツチって言うんだよね。そんな慣れてないから。文字面でしか知らないから。プラトニックな恋愛ほど綺麗じゃないんだけど、とてつもなく策略を考え出すわりには、本当に手に入ると何も考えなくなっちゃう。だから別れたのかな。だから今、ばいばいされたのかな。わかんないことしかない。意味がわからないの意味もわからない。

野島のことを知る前に、私のことさえ私、わかってない。表面しか知らない。もっと奥底、これです私ってこうなんですっていう、私の肉体やら精神やらっていう論争を超越した弩真ん中びったりな答えもフレーズも、何一つ。ばっかじゃん私。

最初から予備校行けよ。野島に勝手に振り回されている気にならないで。昨日からここまで来て引き返すの、何回やってんだよ。成長しないな。

今日もまた勝手に幕を下ろした今日のエンドロールには『Fat Bottomed Girls』が頭の中で流れるわけ。頭の中での再生じゃ物足りなくて、充電の少ないアイポッドを取りだして、イヤホンで耳を塞ぐ。アーユゴーナティックミーホームトゥナイト！歌詞の意味は全然本日のハイライトにはならないけど、メロディがなんだかこんな自分を馬鹿にしながら顔を上げなくなる。さつきJ・POP侮れんとか言ったけど、やっぱ全然関係ない曲聴くと何故か幸せになれるのね、共感は得られなくても。共感はそんなに大事なかな。私は男じゃないし同性愛者でもなければ、ふしだらな下半身デブ女に新しい世界なんて見せて頂かなくてもいいんだけど、なんかいいの。言ってることの意

味がわからないのに泣けてくるとかがいい。むしろこれに共感している方が色々とやばい。

どうか今夜はあの家に来てつてくれない？あの赤いランプがある場所へ、別に気張らなくていいからさ。イエーイエーカモン。赤いランプもないし、怒られることもないから帰るべき場所に帰るのに殊更緊張はしない。家にはメロンソーダを飲みつくすお母さんしかいないけど、イエーイエーイエー。私が共感するよりも先に、言葉で圧倒してくれなくちや。ロケンウォーゴラーウン。

(続)